

ふるさと交流館・札天山収蔵館だより

令和2年7月号

「ふるさと交流館」・「札天山収蔵館」の開館期間を変更しました。

両館とも、6月1日～9月30日まで、開館日等は下のカレンダーで毎月お知らせします。
 なお、休館日に施設の見学を希望される方は、事前に教育委員会にご連絡ください。

6月19日(金)からは人数制限を解除して通常開館しております。

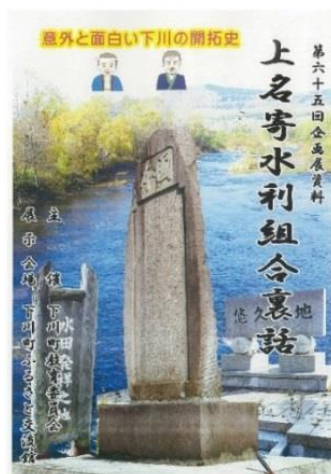
ただし、感染症対策として、『3つの「密」を避ける』、マスク着用にご協力をお願いいたします。

第65回企画展「上名寄水利組合裏話」開催中!

とき 6月3日(水)～9月30日(水)
 午前9時30分～午後4時30分
 ところ ふるさと交流館 ロビー

今回の企画展では、上名寄水利組合設立にまつわる裏話を、古屋達造の自伝「古屋家開祖父母の足跡を訪ねて」から抜粋して紹介します。米作りを夢見て実現させた開拓民達の記録を、古屋達造の目線で紹介していきますので、是非ご覧ください。

★展示解説書を下川町ホームページに掲載していますので、ご覧ください。



札天山収蔵館(旧一の橋小学校)を開館しています!

◎開館日・時間 6月1日(月)～9月30日(水)の
 土曜・日曜・祝日の午前10時～午後4時

旧一の橋小学校を改修して、昔の生活道具や産業資料を数多く展示保存しています。昔の道具を懐かしく思ったり、新しい発見があるかもしれません。お気軽にお越しください。



ふるさと交流館カレンダー							札天山収蔵館カレンダー							＜開館時間・見学のご案内＞	
7月							7月							☆ 開館時間	
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	ふるさと交流館 9:30～16:30	
			1	2	3	4				①	②	③	4	札天山収蔵館 10:00～16:00	
5	⑥	⑦	8	9	10	11	5	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	11	☆ ふるさと交流館は入館料が必要です。札天山収蔵館は無料開館しています。	
12	⑬	⑭	15	16	17	18	12	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	18	☆ ○の日の休館日に見学を希望される方は、事前に下川町教育委員会にご連絡ください。	
19	⑳	㉑	22	23	24	25	19	⑳	㉑	㉒	23	24	25		
26	㉗	㉘	29	30	31		26	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛			
○の日は休館日							○の日は休館日								

☆お問い合わせ先

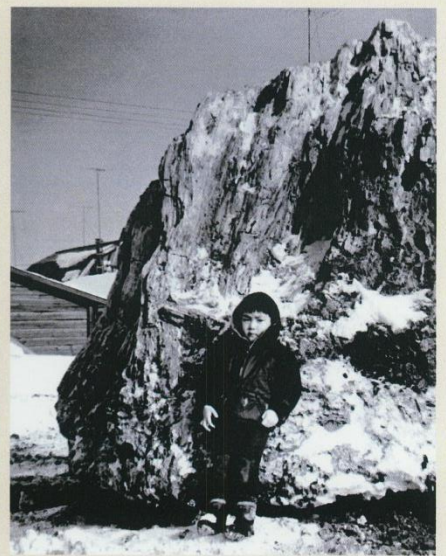
下川町教育委員会 01655-4-2511(内線511) IP4-251111
 ふるさと交流館 4-2627 札天山収蔵館 6-2001

<珪化岩と人 ～ふるさと交流館展示パネルから～ >

下川町の郷土資料には、火山活動で作られた岩石に残された植物化石と、その石材を利用した人類の歴史を見ることができます。来館の際はぜひ関係する資料をご覧ください。



糸毛の滝



最大級の珪化木 (昭和44年)



グリプトストロプス・ルベノサワエンシス



西町1遺跡出土石核



名寄職業訓練専修校 宝石科 下川分室 (昭和48年)

写真の滝は「糸毛の滝」と呼ばれ、二の橋地区にある名寄川支流「ポンモサンル川」、通称「ルベの沢川」にあります。この滝は落差約5mと小さいが、雑木林の中であって四季折々その表情を変え、見たものを魅了する滝です。今回はこの滝の成立と歴史について、古生物学、地質学、考古学、民族学、民俗学などの研究から明らかになってきたことについてお話します。

この滝口には黒色～茶褐色の硬い岩層（珪化岩帯）が厚く堆積していますが、この岩層ができたのは今からおよそ1,200万年前で新第三紀中新世の火山活動により作られました。この頃、下川町の街なみのあたりは、くぼ地で水が溜まり湖になっていました。その湖に周りから土砂が流れ込み堆積したものの一部が岩層となりました。この滝で見られる珪化岩はその一つです。岩盤には当時の植物が潰されずに化石となったものが数多く含まれています。これは、当時の火山活動によって地下から高压で多量の熱水が噴出し、その熱水に含まれていた珪素が植物の中に染み込む珪化作用によって生成されました。さらにその熱水は金鉱脈も作りました。

千葉大学の松本みどり氏等はモサンル層に含まれる植物化石の研究から、ゼンマイ属（オスムンダ・シモカワエンシス）、トウヒ属（ピセア・ナカウチイ）、ツガ属（ツガ・シモカワエンシス）、スイショウ属（グリプトストロプス・ルベノサワエンシス）、ミソハギ科（デコドン・モサンルエンシス）など新種の植物化石を発見しました。また名寄川やサンル川の河床には「化石林」が保存され、当時の森林の様子がわかります。

珪化岩の上には約一千万年もの歳月をかけて土砂が堆積し、川の侵食によって谷が作られ現在のような姿になりました。

数万年前の旧石器時代、滝周辺にはこの岩や石を割り石器を作る人々が集まるようになりました。滝周辺の考古学調査している札幌学院大学鶴丸俊明助教授等のルベの沢遺跡調査団の発掘調査では、各地層から珪化岩を使用した石器や石核・剥片が多量に出土し、ここで長期間石器製作が行われていたことを発見しました。

やがてアイヌ文化の頃になると川はアイヌ語で峠の意味の「ルベシベ」と呼ばれ、アイヌ人達はこの川を道として狩猟や採集をしていました。

大正時代になるとサンルの奥では三井鉱業所による金銀鉱石の採掘がはじまり、昭和30年代には折からの庭石ブームに乗り珪化岩（木石）が旭川・札幌遠くは東京へと大量に売られ、時には重さ30tもの岩が貨車に乗せられて行きました。